

税務署長対談

管内概況を教えてください

(吉岡)室蘭署管内(3市3町)では、「鉄の街」室蘭は製鉄・製鋼会社が多い北海道有数の重化学工業地域である一方、登別温泉と洞爺湖温泉という2大温泉地を有するほか、りんご・ぶどう・いちご等の果樹栽培も盛んで、様々な産業が特徴的です。

(竹中)王子署の管轄である東京都北区には、日本の近代産業の発展を支えた洋紙発祥の地や新一万円札の顔となった渋沢栄一翁ゆかりの飛鳥山等、歴史ある地域がある一方、交通の便の良さから、近年は再開発が進む地域もあります。

(田中)熱海税務署は、熱海市及び伊東市を管轄しています。両市とも昔から温泉地として知られており、特に熱海市は、首都圏からのアクセスも良く、令和6年度の宿泊者数が306万人となるなど非常に賑やかです。

(向井)かつて炭鉱で産業都市として発展した歴史を持つ大牟田市の他、川下り等の観光でも知られる柳川市、みやま市の3市を所管しており、有明海沿岸を中心に海苔生産も盛んな地域です。

「税務署長」の仕事はどんなものでしょうか？

(吉岡)税務署では、納税者からの申告・納税をサポートするほか、必要に応じて調査を行い、課税処分や滞納処分を行います。これらの処分は税務署長の名の下に行うため、各担当職員が熟慮して検討した案件について十分な議論を重ね、最終的な判断をすることが現場の最終責任者としての「税務署長」の重要な仕事の1つです。

(向井)吉岡署長が仰った、現場の「最終責任者」という役割に加え、e-Tax申告やキャッシュレス納付の推進等の各種施策を外部にPRする役割も担っており、関係団体等のご協力もいただきながら、講演等の場で周知・広報を行っています。そして、最前線で働く職員が能力を最大限発揮できるよう、署全体をマネジメントすることも大切な仕事です。

(田中)税務署長の仕事は「税務署のリーダーとしての仕事」と「税務署の代表者としての仕事」に分けられます。

「税務署のリーダーとしての仕事」は、1年間の事務計画の策定や進捗状況の確認などを通して、税務署のマネジメント全般を担うこととなります。また、最終決裁権者として、担当の署員とともに事案の検討を行うこともあります。「税務署の代表者としての仕事」は、管内の自治体や税理士会のほか、関係民間団体との円滑な協調関係を築くことが最大のミッションとなります。税務署だけでできることは限られており、このような方々との協調関係を築くことは非常に重要です。

(竹中)税務署長は、対外的には署の顔、対内的には組織のリーダーとなります。

日頃から協力頂いている関係民間団体や他の行政機関の長との対話を通じて、管内概況や各課題を把握したり、自ら、今後の施策について関係者に説明を行うこともあります。

対内的には、様々な場面で判断が求められます。判断には、現状把握と課題の特定が重要と考えていて、可能な限り、自分で見聞きするようにしています。

税務署長として特に心がけていることは？

(竹中)庁と署の橋渡し的存在となることを心がけています。

国税組織は、庁、局、署の三層構造になっていて、庁にいる職員が署の現場を知る機会は限られます。そのため、庁にいた当時、署まで情報がつましく伝わっているかどうか分からず、モヤモヤすることもありました。

署長になってからは、庁が目指す方向性や検討中の課題について、さりげない会話の中で話題に出してみたり、署で抱えている課題について話を聞いたりしています。自分が判断した事項が税務署や納税者からどのように受け止められているのか聞くときは、非常にドキドキしますが、良い内容もそうでない内容も、次に繋げていきたいです。

(吉岡)税務署長は「税務署の顔」として、外部の方々とお話する機会が多いです。特に室蘭税務署では、初の女性署長かつ国税庁総合職の署長ということもあり、地元新聞等からも多くの取材をしていただきました。それは、納税者にとってより便利に税務手続を行うことができる「e-Tax」や「キャッシュレス納付」といった国税庁の各種施策を、積極的にPRすることができる、大変ありがたい機会でした。

「税」は、誰もが関わる社会の仕組みであり、皆さんの関心が高い一方、わかりにくいという印象を持たれることが多いです。税務署長としてセミナーや講演、取材等に対応する際は、情報の受け手である納税者にとってわかりやすくお伝えすることを第一に心がけています。

(田中)吉岡署長が仰ったように、税務署長は署の代表であり、外部の方や地域の方々と接する機会が数多くあります。税に関する知識を深めることは当然として、昨今の経済情勢や安全保障情勢といった時事ネタに加え、地域の問題を必ずチェックするようにしています。地域の話題については、普段からお世話になっている方々が地元紙やローカルテレビで紹介されることも多いので、毎日欠かさずチェックしています。

(向井)不足する現場経験を補うべく、経験年数や立場を問わず、署職員や外部で出会う関係団体の方々の話をよく聞くことを心掛けています。その上で、これまでの職務経験で得た様々な情報と総合して自分の頭で考えてみて、疑問を感じた点については積極的に質問、議論をするようにしています。これまであまり接点の無かったバックグラウンドを持つもの同士、新たなアイデアが生まれることもあり、日々刺激を感じながら仕事をしています。

税務署のトップとして特に力を入れた(入れている)業務は何でしょうか？

(田中)もちろん幾つもありますが、強いて言えば確定申告におけるスマホ申告の推進でしょうか。一昔前は、確定申告といえば必要な書類を持参して税務署へ行くことが当然でしたが、今や自宅に居ながらスマートフォンで確定申告をすることが当たり前となりつつあります。特にマイナンバーカードを使った確定申告は、必要な情報をデータ連携できるため、入力する手間が少なく非常に便利です。私自身もデジタル庁に出向していた際に携わっていたこともあり、非常に思い入れもあるので、管内の自治体や企業を訪問して自ら周知・広報をさせていただきました。



平成27年入庁
札幌国税局
室蘭税務署長
吉岡 鮎美
国税庁課税総括課、国税庁企画課企画第一係長、留学(南カリフォルニア大学)、金融庁企画市場局企業開示課補佐などを経て、令和6年から現職。

平成27年入庁
福岡国税局
大牟田税務署長
向井 真人
国税庁国際業務課、国税庁調査課企画係長、留学(エグゼター大学)、国税庁課税総括課補佐などを経て、令和6年から現職。

平成26年入庁
名古屋国税局
熱海税務署長
田中 宏明
内閣官房副長官補付、財務省主税局税制第一課、デジタル庁統括官付参事官付参事官補佐、国税庁総務課補佐などを経て、令和6年から現職。

平成18年入庁
東京国税局
王子税務署長
竹中 茉莉子
留学(ボストン大学大学院)、金融庁総務企画局企業開示課補佐、国税庁法人課税課補佐、国税庁消費税室課長補佐などを経て、令和6年から現職。

(向井)国税庁では、これまで各税務署で行っていた申告書の入力・処理などの内部的な事務を効率的に処理するため、担当職員とともに全国各所に設置するセンターに集約する「センター化」を進めており、当署においても、令和6年11月からセンター化の対象になりました。準備は入念に進めてきましたが、特に移行期においては業務に対するリソースのバランスが変動し、予想しなかった状況が発生することもあるため、署内各部門の状況を把握しつつ、署の業務を確実に遂行できるよう、必要に応じて国税局とも連携して業務改善を図っているところです。

(竹中)将来像として掲げている「納税者の利便性向上」「課税・徴収の高率化・高度化」「事業者のデジタル化促進」を進めることに力を入れています。

国税組織では、あらゆる税務手続が税務署に行かずにできる社会を目指しているわけですが、524署の税務署が同じ手段で目的を達成できるわけではありません。23区の中でも高齢化率の高い北区において、地域の特性をよく見つつ、他の行政機関や金融機関等とも連携・協力しながら、税務行政のDX・BPRを進めることが重要と感じています。
(吉岡)税務署では、若手職員からベテランの職員まで、多様なメンバーが日々仕事に励んでいます。職員が希望を持って働けているか、互いに意見を言いやすい環境となっているか等、真に「明るく風通しの良い職場」とは何かを常に考え、職場全体に目を配るようにしています。

また、例えば国税庁が推進している「業務の効率化」に対し、実際に現場の職員がどのように考えているのか率直な意見を聞いたり、逆に国税庁の立場としてアイデアを提案してみるなど、国税組織が一体となって良い職場環境を醸成できるよう、様々な場面で思案しています。

最後に、学生の皆さんへメッセージをお願いします！

(吉岡)学生の皆さんも、買い物をする際は消費税を払っています。また、アルバイトをして所得税を納めた経験がある方も多いと思います。このように、誰にとっても身近な「税」の仕組みをきちんと理解し、納税者の自発的な申告・納税が円滑に行われるよう、また適正な申告・納税を行った納税者が不公平感を抱くことのないよう、より効果的な手段や手続と一緒に考えてみませんか。きっと学生の皆さんの柔軟な思考力やチャレンジ精神を活かせる場になると思います。

(向井)私自身、税という専門性を軸に、霞ヶ関から海外まで、多様なフィールドで働ける点に魅力を感じ、国税庁の門を叩きました。入庁後の10年間で改めて振り返ると、税務署長の他にも国税庁での様々な業務、英国留学、金融庁出向で経験した税制改正業務等の多様な経験をさせていただき、概ね期待を裏切らない職場だと感じています。感じる魅力は十人十色ですので、無理に染まろうとせず、ご自身の感性に従った結果として国税庁を選択肢に入れていただけると幸いです。

(田中)若くして税務署長という責任ある仕事を任していただけることは、時に重責に押しつぶされそうになりつつも、大変やりがいを感じています。今回の特集を読んで「私もやってみたい!」と思った方は、是非とも国税庁を訪問いただければと思います。

(竹中)税務行政をとりまく環境変化に伴い、国税組織も大きな変革期を迎えています。

私が入庁した当時よりも、この環境変化を当たり前のものと捉え、果敢にチャレンジしていく組織風土が醸成されていると感じます。このような組織の中に身をおけば、きっと、やりがい・働き甲斐を感じるはずですよ。
税務のバックグラウンドがある方だけではなく、本日、初めて国税組織を知った方にも、これを機会に国税組織に更に興味を持っていただければ嬉しく思います。